

これからの自然保護

井 手 貴 夫

自然保護というときに、必ずいわれることは開発との調整の問題である。そしていわゆる調整された結果はこれまで必ず自然の後退であった。このことは人口が増加して行くかぎり、いわゆる社会が発展して行くかぎり、必然的な現象と従来考えられてきた。

しかし社会が発展して行くことは、人間の生活環境がよりよくなる、ということであるはずである。人間がより快適に、より自由に、より豊かに生活できる環境であるはずである。しかもその生活の根底にはより健康に、という根本前提がなくてはならないはずである。開発ということが一方でもたらした多くの公害、水・空気・土壌の汚染を考えると、私たちはまず人類の健康を考えねばならないときに来ていることを痛切に感ずるのである。しかも人類が健康で快適な生活をおくるためには、ある一定の余地が必要となってくる。それは単に毎日の生活の余地だけではなく、レクリエーションの場も必要になってくる。土地が狭くなってくれば、水上の生

活、空中の生活ということをも未来学者たちは提言する。しかしきゅうくつになるのは生活の場だけでない。食糧も水も空気もきゅうくつになるはずである。

一方で現在の経済機構は毎年の収入の増加を期待している。収入がふえるためには、余計に物を作り、余計に物を売らねばならない。そのためには人口の増加が必要である。

一方では生活の場と食糧その他に制限があり、他方で経済機構は無限の膨脹を期待している。開発と自然保護の調整の問題は、じつはここに根本があるのである。そして、現在の経済機構の膨脹が五十年、百年先に行き止まることは目に見えている。しかも、これは一国で始末し得ない問題である。国際的な見通しと協調と人間の高い英知とがこれを解決し得るかどうかに、われわれの将来はかかっているのである。しかもそれは個々人の自覚と、われわれの周囲の生活環境改善、自然保護の推進の上へのみ期待せられることである。

(理事長)

